3 県内の産業活性化と新事業創出に向けた取組み

大規模商談会「TECH BEAT Shizuoka」の開催

静岡県 ｜ 静岡銀行

地方銀行と地公体が連携し、県内最大級の大規模商談会が実現。地元企業と先端技術を有するスタートアップ企業の協業により、オープンイノベーションを加速させ、県内の産業活性化と新産業創出を目指す。

「TECH BEAT Shizuoka」の会場である静岡県・東静岡駅すぐそばの「グランシップ」

静岡県の概要

【人口】3,533,780人（2024年5月1日時点）

- 雄大な富士山や、駿河湾などの自然美、伊豆半島や熱海などの多くの観光地があり、首都圏からのアクセスの良さなどの「地の利」にも恵まれていることから、毎年多くの観光客が訪れている静岡県。
- 静岡県内総生産の約40%は製造業が占めており、製造品出荷額等は全国３位を誇るなど、製造業の集積の厚さが県内経済の基盤を支えている。
- また、全国一の水揚げ額を有する焼津漁港や、静岡茶、ミカンなどの特産品も有名であり、第一次産業も盛ん。

パリのイベントに着想を得たテックイベント

静岡県は、総生産の約40%を製造業が占めるなど、全国有数のものづくり県として知られる。

静岡銀行は、そんな静岡県において、新事業創出・事業拡大や、他社との協業によるオープンイノベーションを促進させるため、県内企業と先進技術や斬新なソリューションを有するスタートアップ企業等をマッチングする、大規模テックイベント「TECH BEAT Shizuoka」を開催している。

このイベントは、遡ること2018年5月、フランス・パリで、同行の中西代表取締役会長（当時）が、世界最大級のテックイベント「VIVA TECHNOLOGY（以下、ビバテック）」を視察したことに始まる。同会長は、ビバテックの規模感や世界中を巻き込む熱気、そして名だたるグローバル企業が世界中のスタートアップ企業からソリューション提供を受け入れて自社の課題を解決しようとするオープンイノベーションの姿勢に、大きな衝撃を受けたという。「TECH BEAT Shizuoka」は、静岡銀行が静岡県と連携して、「静岡県でも、世界中にイノベーションを起こすようなテックイベントを開きたい。」という想いを結実させたものである。

「TECH BEAT Shizuoka 2023」の様子
（TECH BEAT Shizuoka Facebook より）

2023年度までの過去９回（コロナ禍でのオンラインイベント６回を含む）の延べ開催実績は、参加者数２万人超、出展スタートアップ500社超、商談件数1,700件超に及ぶ。単なるビジネスマッチングにとどまらず、毎回、日本を代表する経営者・学識経験者による各種セッション（名だたる著名人による基調講演やトークセッション）のほか、優れた協業事例の表彰（後述）、先進的な技術の展示・体験により、来場者に常に新たな気づきと刺激を提供し続けている。

「TECH BEAT Shizuoka 2023」の様子
（TECH BEAT Shizuoka Facebook より）

協業による新サービスの創出

本イベントでは、協業機運を醸成するとともに参加者のモチベーションアップを図るため、2020年度より、優れた協業事例を表彰する「TECH BEAT Shizuoka AWARD」を実施。地域産業の活性化及び社会課題の解決に資する事例に「静岡県知事賞」、企業業績拡大への大きな貢献が期待できる斬新なビジネスモデルの事例に「実行委員会委員長賞」を授与している。ここでは、2021年度に静岡県知事賞を受賞した、㈱アイファーム（浜松市）と㈱スカイマティクス（東京都）の協業事例を紹介したい。

㈱アイファームは、静岡県浜松市内にて主にブロッコリーを生産する農業法人である。ブロッコリーは可食部である花蕾の生育に個体差があり、均一規格を収穫することが難しい作物のひとつ。さらに収穫適期も他の作物に比べて短く、生育が進み過ぎると商品価値がなくなってしまうため、収穫期は人の目によるサイズ確認および選別収穫作業が必要であることに同社は大きな負担を感じていた。

こうした課題を解決するきっかけになったのが、2020年度のTECH BEAT Shizuoka for Agriに出展していたスタートアップ企業㈱スカイマティクスとのマッチングである。

㈱スカイマティクスの強みは、ドローンを活用したＡＩ画像解析技術。㈱アイファームは、この技術を活用し、ブロッコリーの収穫適期の画像データを学習させ、ドローン空撮の画像解析により農地内の花蕾サイズを計測して収穫適期か否かの判断をＡＩが行う「ブロッコリー収穫適期システム」を共同開発した。これにより、人の目によらずとも、農地内のブロッコリーの収穫適期の花蕾の個数を把握できるようになり、作業員の負担軽減と大幅なコスト削減が可能になった。

両社は今後、蓄積した栽培データを活用した新規事業の開発も検討しており、全国のブロッコリー生産者の営農・栽培の更なる効率化およびブロッコリーの安定供給化に貢献していきたいとしている。

静岡銀行、静岡県の取組み

2020年度以降は、新型コロナウイルスの感染拡大によりイベント開催が困難な時期もあった。しかし、オンラインツールの活用による遠方の企業同士の個別商談のセッティングや、コロナ禍で世界的に評価された台湾のデジタル担当大臣（当時）オードリー・タン氏を講演講師として招聘する等、実行委員会の企画力により、イベントは年々盛況を呈している。

直近の2023年度は、全面的にリアル開催に回帰しただけでなく開催日数を２日間から３日間に延長して、対面ならではの偶発的な出会いによる共創機運の拡大を果たした。銀行と地公体が連携し、オープンイノベーションを加速させていくことで、地域の未来を切り開く取組みが続いている。

Column

「しずおかキッズアカデミー」の開催を通じた郷土愛を持つ次世代人材の育成

静岡県は、2020年度の県外流出人口が4,395人（総務省 住民基本台帳報告書）となり、このうち多くを占める15～24歳の若年世代では、進学や就職を機に県外へ流出している。

こうした状況下で、静岡銀行は、人口流出に歯止めをかけるため、地方公共団体、地元教育委員会、地場企業等と連携し、「しずおかキッズアカデミー」を開催している。

「しずおかキッズアカデミー」は、地域の未来を担う子どもたち（小学生）に、大学進学後も地元へＵターン就職するなど「地元に帰ってきたい」と思ってもらうことを目的に、地域の産業や特産品などを学ぶ機会を提供するもの。2016年度の取組みを皮切りに、県内各地でこれまで全18回開催し、のべ1,761名の親子が参加。毎回定員を上回る応募があり、人気を集めている。

2020年10月に開催した「しずおかキッズアカデミー@伊東」では、地元のレストランシェフ協力のもと、伊東市の昔からの特産品である「海産物」と新しい特産品である「オリーブ」を使った、パスタを作ることにより、五感を通して地元の魅力を学んだ。

また、2021年３月に開催した「しずおかキッズアカデミー×元気！しずおか人 in 松阪屋」は、静岡の特産品の生産現場から販売まで、商流を楽しく学びながら、松阪屋で販売の実体験をする取組みとして、３年連続で開催している。コロナ禍において、開催方法をオンラインに変更し、生産現場の様子を動画で配信した。販売体験は、松阪屋の販売員から接客を学ぶ「おもてなし講座」と、事前に動画を視聴した子どもたちからの質問に対し、生産者から回答する形式で実施した。

「地公体や地場企業と連携し、県内各地の特徴にあったテーマを選定し、子どもたちにとって魅力的な経験となるように体験学習を織り交ぜながら、地域産業に触れる機会を提供しています。参加した子どもたちが将来就職する際に、地元へＵターン就職をしてもらい、人口が流入に転じることを目指しています」と期待を込める（静岡銀行）。

「しずおかキッズアカデミー@伊東」における特産品を使ったパスタ作り体験（静岡銀行提供資料）

号外！

未来の顧客も大歓迎！TECH BEAT Shizuoka2024 徹底解説！

静岡銀行が静岡県などと共同で毎年実施している大規模商談会「TECH BEAT Shizuoka」。開催６年目となり県内の認知度も高まる中、2024 年は初の土曜日を含めた日程での開催を実施し、大きな盛り上がりを見せた。オープンイノベーションを通じた人材育成・地域経済の発展に資する取り組みを行う同イベントを密着取材した。

すべての人に先端技術に触れる機会を提供

2024年7月、静岡県の複合文化施設「グランシップ」は、スーツを着たビジネスパーソンだけでなく、学生や小さな子どもたちなど、大勢の熱気につつまれていた。そのお目当ては「TECH BEAT Shizuoka」。「老若男女問わず、誰もが、気軽に先端技術に触れられるイベント」とすることが、今年のテーマだ。ビジネス商談会の枠を超えた、本イベントの魅力に迫る。

初めての土曜開催！ファミリーがあつまる商談会へ

今回のTECH BEAT Shizuokaは、2024年7月25日（木）～27日（土）の3日間、初めての土曜日を含めた日程で開催された。土曜日を含めた理由は、”平日には来られない家族連れや学生にも来てもらいたい”という主催者の熱い思いから。

一見、ビジネス商談会には不釣り合いに見える「子ども」や「学生」だが、彼らへのアプローチは、将来大きなアドバンテージになる。実は、TECH BEAT Shizuoka着想を得たきっかけのフランス「ビバテック」でも「ファミリーデイ」が設けられており、未来の社会をよりよくするため、子どもたちが最新技術に触れる機会を提供している。「こういった地道な人材育成が将来静岡県を盛り上げる大きな力になると信じている」と主催者の静岡銀行担当者は語る。

このため、土曜日は特に、子どもや学生を意識したコンテンツを多く用意した。講演登壇者には「ポケモンＧＯ」の開発・運営を担う㈱ナイアンティックの代表取締役社長 村井説人氏を招聘。他に、ＶＲ（仮想現実）と自転車を組み合わせて1.8キロのコースを巡るバーチャルサイクリングの体験コーナーや、全国各地の空撮映像を半球型のスクリーンに映し、没入感の高い視覚体験を味わえるコーナー、ＡＲ（拡張現実）技術を使った「砂遊び」の体験コーナー等、子どもたちが喜ぶ仕掛けを沢山盛り込んだ。

結果、2024年の３日間合計来場者数は、昨年の約6,000人を上回る7,622名と大盛況であった。また、土曜日の来場者数2,038名のうち２割弱が12歳以下であった。

▼AR 砂遊びを楽しむ子供たち

▲高専生の制作したロボットの操作を体験。大人でも意外と難しい。

▲半球状ドームビジョン体験。まるで空を飛んでいるかのような浮遊感があった。

銀行の「目利き力」を活かした出展企業の選定

当然、メインであるビジネス商談会としてのクオリティも揺るがない。イベントとして重要なのは、良質なスタートアップ企業のソリューションにより、県内企業を持続的に成長させること。そのため、出展スタートアップ企業は量よりも質を重視し、静岡銀行が「目利き」を行い、毎年選出している。

◀東京のスタートアップ企業 WHILL㈱が開発した「歩道を走れるスクーター」。本イベントへの出展をきっかけに静岡スバルとの協業により県内スバルで購入可能になった。

▲2024 年の会場の様子。過去最大規模の約 140 社が出展。

また、静岡銀行では、マッチングが成立した企業同士のその後の経過についても定期的にアンケートを行い、最終的に協業に繋がったかどうかフォローアップ調査を実施している。調査の中で協業に至った事例は、イベント内で表彰を行っており、参加企業の協業意欲の促進に繋げている。

県内企業同士の協業から世界初のシステムが誕生

2024年の「実行委員会委員長賞」を受賞したのは、医薬品業界向けの機器メーカー「㈱イシダテック」と県内スタートアップ企業である「㈱ゼロワン」の協業事例である。

㈱ゼロワンは、「空間の可視化」を可能にするデジタルツインソリューションシステム（現実世界を３Ｄで再現する技術を用いたサービス）を手掛ける。用いられる技術は、カメラを使わずセンサーで空間にいる人の居場所や空気環境を検知するため、主にプライバシーが重視されるクリニックや商業施設などで採用されている。昨年度のTECH BEAT Shizuokaでマッチングした㈱イシダテックと、同社が取り扱う特殊な空間殺菌デバイスとコラボし、室内モニタリングデータから自動で空気中のウイルス、カビ、化学物質などを非活性化するシステムを開発し、空間の可視化だけでなく、検知した空間の状況に応じた殺菌が可能となったという。（現在特許出願中）。

▲㈱イシダテックの空間殺菌デバイス。光触媒を用いて人体への影響を抑えて空気中の殺菌が可能。

▲㈱ゼロワンの室内モニタリングシステム。待合室の混雑状況をリアルタイムで可視化できる。

静岡の将来を支えるイベントへ

「いずれは、TECH BEAT Shizuokaを、国内外から静岡に人が集まるイベントにしたい。」と静岡銀行担当者は今後の展望を語る。少しずつ県内企業のマインドにも変化があり、新規事業開発にチャレンジする企業も増えてきた実感もあるという。イベントを通じて醸成されたオープンイノベーションの文化が、県を越えて国内中に影響をもたらす日もそう遠くないかもしれない。